

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00076

研究課題名(和文) 宗教学生成期における宗教起源論の系譜をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study of the genealogy of theories of religious origins in the period of the germinal stage of religious studies

研究代表者

江川 純一 (Egawa, Junichi)

明治学院大学・国際学部・研究員

研究者番号：40636693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：宗教起源論を考える上で欠かせない19世紀英国、すなわちヴィクトリア時代(1837年～1901年)の宗教論の検討と、その批判的継承といえる20世紀のフランス、オランダ、ドイツ、イタリアにおける宗教論の再検討を行った。

研究代表者である江川は、解説論文「ヴィクトリア時代の宗教研究 その地域性と特殊性」を執筆し、2023年3月に、「シリーズ 宗教学再考」(国書刊行会)のなかの一冊として、江川純一・山崎亮監修、『マナ・タブー・供犠 英国初期人類学宗教論集』を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで宗教論として深く検討されてこなかった、ヴィクトリア時代の宗教論の特徴として、1)「進歩イコール進化」、2)「未開イコール原始」、3)「起源イコール本質」の三点が前提とされていることを導き出した。

そのうえで、20世紀後半の宗教概念批判を先取りする視点が既にロバートソン・スミスによって、マギア(呪術・魔術・魔法)を人間にとって普遍的なもととして捉える見方がフレイザーによって、提出されていたことを明らかにした。

これらは、我が国の今後の宗教研究の基礎となるはずである。

研究成果の概要(英文)：This project focuses on examining the religious theories of 19th-century Britain, particularly the Victorian Era (1837-1901), as a crucial foundation for understanding the origins of religion. Additionally, it re-evaluates 20th-century religious theory in France, the Netherlands, Germany, and Italy, considering them as inheritors of the Victorian Era's critical insights. The principal investigator, Egawa, has contributed a commentary paper titled 'The Study of Religion in the Victorian Era: Its Regionality and Particularity', which was published in March 2023 as part of the "Series: Rethinking Religious Studies (Shukyo-gaku Saikou)", under the supervision of Junichi Egawa and Makoto Yamazaki, 'Mana, Taboo, and Sacrifice: British Early Anthropological Essays on Religion' was published as part of this project.

研究分野：宗教史学

キーワード：宗教起源論 ヴィクトリア期 マナ タブー トーテミズム

1. 研究開始当初の背景

1962年に刊行された、W・キャントウェル・スミスの著作『宗教の意味と目的』（保呂篤彦、山田庄太郎訳、国書刊行会、2021年）を嚆矢として、1990年以降に顕在化した所謂「宗教概念批判」によって、「宗教」概念はある種の揺らぎの時期を迎えることとなった。「宗教」は近代的な概念であり、キリスト教、それもプロテスタンティズムを基礎とした西欧のものであること（"religion"の訳語として用いられはじめた日本語の「宗教」も同様である）が明らかになったのである。そのような背景を持つ「宗教」概念をもとにして先史、古代、中世の事象、また非西洋の事象を説明することは、ある意味で近代西欧の学を普遍の真理として振りかざすことであり、事象を歪めることになってしまうのではないかと、宗教の研究者はこうした問いから目を背けることができなくなったと言える。たとえば「宗教は教義・教団・教祖を備える組織的全体である」とする見方に囚われると、民間信仰や民間伝承を「非宗教」もしくは「未宗教」として位置づけることになってしまう。また「宗教」を信条と実践にわけたうえで、信条を重視し、実践の根拠を信条に探る見方に囚われると、神話の共有による実践、人々の日常生活に結びついた実践を取りこぼしてしまう。

このように「宗教概念批判」には一定の意義が存在するが、皮肉なことに「西洋近代の【宗教】概念」、「プロテスタント的【宗教】概念」といった新たなステレオタイプを流布することになった。だが「西洋近代的な宗教理解」といっても、それが単一であるはずはない。宗教研究は複数の異なるコンテクストにおいて、複数の言語によって行われてきたのである。そのため、各言語圏における宗教研究に関する歴史的・社会的・文化的検討が必要となり、学問史研究の重要性が増したと申請者は捉えている。「宗教概念批判」の流れは、ヨーロッパ宗教の研究者に「新たな作業」を与えることになったのである。しかもわれわれは日本語で思考しているのであるから、ラテン語の"religio"、各国語の"religion"だけでなく、日本語の「宗教」についても考えなければならない。

こうした状況をふまえ、本研究では宗教学生成期の再検討を行う。鍵となるのはヴィクトリア期イギリスの宗教研究、人物名でいうと、フリードリヒ・マックス・ミュラー、エドワード・バーネット・タイラー、ウィリアム・ロバートソン・スミス、ジェームズ・ジョージ・フレイザー、アンドルー・ラングの仕事である。たとえばロバートソン・スミスは、先に触れた20世紀末の問題、すなわち「宗教」をビリーフからのみ考えることの限界について、さらには、聖概念を近代の内側でのみ思考することの不可能性について、既に『セム族の宗教』（1889, 1894）のなかで指摘している。彼らの宗教論を再考する意義は大きい。

一口にヴィクトリア期の宗教研究といってもあまりに膨大であるため、対象を限定する必要がある。ヴィクトリア期のイギリスでは、世界各地から集まってきた事例を一本の糸で説明することが意識されたため、宗教に関しては、必然的にその起源が重要な研究対象となった。このようにして提出されたミュラーのナチュリズム、タイラーのアニミズム、ロバートソン・スミスのトーテミズム、フレイザーのトーテミズムとマジック、ラングの最高存在は、20世紀の各国の宗教研究に批判的に継承されることになる。すなわち、フランス『社会学年報』学派、イタリア宗教史学派、ドイツ・オランダの「宗教現象学」である。そのため、宗教起源論の系譜に狙いを定めたい。

2. 研究の目的

宗教学にとってヴィクトリア期イギリスの宗教研究が重要であることは、共有されている認識であるが、ひとつ大きな問題が存在する。我が国においては、ヴィクトリア期イギリスの宗教研究の専門家が皆無なのである。したがって、ヨーロッパの他国の宗教研究を専門とする者による共同研究が不可欠である。

本研究では、イタリア研究の申請者、フランス研究の山崎亮、ドイツ・オランダ研究の久保田浩の三人が協力し、それぞれの専門領域との関係を意識しながら、ヴィクトリア期の宗教起源論を研究する。フランス『社会学年報』学派のデュルケームは『宗教生活の基本形態』第一部において、タイラーの「アニミズム」、マックス・ミュラーの「ナチュリズム」、ラングの「最高存在」を批判的に検討した。また、イタリア宗教史学のペッタッツォーニはラングの最高存在論の「神学性」を否定する形で研究を展開した。さらにドイツ・オランダの「宗教現象学」は、価値判断を伴った「宗教の進化」を前提としない、宗教の総合的研究の試みであったといえる。共同研究によって一次資料の読解と議論を進め、「宗教」概念を対象とした学問の新たな系譜を明るみに出したい。

実は、宗教学をめぐる語りにはある種の紋切型がみられる。マックス・ミュラーによる1867年の"Science of religion"概念=用語の使用、また、プロテスタント圏の大学における19世紀末の宗教学講座の誕生を「宗教学の出発点」とし、それ以前を「前史」とする語り方である。だが、このやり方だと、それ以前の思想との連関が見落とされてしまう。そのため本研究では、18世

紀の宗教思想との繋がりを重視し、いずれも「恐怖」に焦点を当てた、ナポリのジャンバッティスタ・ヴィーコの神観念論、デイヴィッド・ヒュームによる宗教起源論を取り上げて、宗教学生成期の宗教論との関わりを分析する。これは独自の視点である。

3. 研究の方法

申請者はまず、マックス・ミュラーのナチュリズムとペッタッツォーニの神観念論との差異、さらに、アンドルー・ラングの最高存在論が、どのようにペッタッツォーニへと受け継がれたかを明らかにする。加えて、18世紀のジャンバッティスタ・ヴィーコ『新しい学(La Scienza Nuova)』(1725, 1730, 1744)における神観念発生の議論が、ペッタッツォーニの『神(Dio)』(1922)、『神の全知(L'onniscienza di dio)』(1955)、『原始宗教における最高存在(L'essere supremo nelle religioni primitive)』(1957)にどのような影響を与えたかを明らかにする。

研究分担者の山崎亮は、マックス・ミュラー、タイラー、ロバートソン・スミス、フレイザー、ラングらヴィクトリア期の宗教起源論と、フランス『社会学年報』学派の接続/非接続を明らかにする。その上で、認識論(デュルケムとモース)、宗教史概念(コペール)、口承儀礼研究(モース)を主題としつつ、併せて学派内でのトーテミズム理解の変遷を辿るなかで、『社会学年報』学派内の思想的影響関係の分析を行う。

同じく研究分担者の久保田浩は、ヴィクトリア期の宗教進化論的思考以後の総合的宗教研究という観点から、「宗教現象学」をはじめとする19世紀後半から20世紀にかけてのドイツ・オランダの宗教研究の分析を行う。さらに、ヒュームの思考がヴィクトリア期の宗教研究にいかんを受け継がれたかを検討する。

4. 研究成果

初年度にあたる2019年度に複数回の研究会と、欧州における資料調査を実施し、「宗教起源論」という問題設定により、18世紀から21世紀にかけての宗教研究を連続した流れとして捉えることができるという知見を導き出した。

2020年度は、19世紀後半から20世紀前半にかけての「宗教」をめぐる諸研究を対象とする研究会をコロナ禍のためオンラインで実施した。発表題目は「アンドルー・ラングの神話学と宗教学」、「社会学年報学派の宗教観」、「宗教現象学」を語ること その歴史と問題点」であった。その結果、フランスの社会学年報学派、イタリア宗教史学派、「宗教現象学」は、いずれもヴィクトリア期の宗教論の批判的乗り越えであったこと。また、フランス社会学年報学派とイタリア宗教史学は、ともにヴィクトリア期の宗教論を「宗教的言説」として認識し、自らを「学問的言説」、ひいては「世俗的立場」として自己認識していたことを再認識した。

その上で、本共同研究に基づく翻訳叢書企画を実現させ、刊行を開始した(全九巻)。研究代表者と研究分担者二名は編集委員・編者・訳者として同企画に参加している。2021年度もコロナ禍による行動制限のため海外での資料調査は叶わず、オンラインにて研究会を実施した。研究会では、江川がヴィクトリア時代の宗教研究(特に、ロバートソン・スミス、フレイザー、マレット)が、自然科学の推移と国内の諸教会の動向に結びついていることを明らかにした発表を行い、討論を行った。

2022年度は、これまでの研究のまとめとして、宗教起源論を考える上で欠かせない19世紀英国、すなわちヴィクトリア時代(1837年~1901年)の宗教論の検討にあてられた。具体的には、スコットランドのジョン・ファーガソン・マクレナン、ウィリアム・ロバートソン・スミス、ジェイムズ・ジョージ・フレイザー、またイングランドのエドワード・バーネット・タイラー、ロバート・コドリントン、さらにはチャールズ・ダーウィンのテキストが対象となった。

研究代表者である江川が解説論文「ヴィクトリア時代の宗教研究 その地域性と特殊性」を執筆し、2023年3月に、「シリーズ 宗教学再考」(国書刊行会)のなかの一冊として、江川純一・山崎亮監修、『マナ・タブー・供犠 英国初期人類学宗教論集』を刊行した。同書は、研究代表者と研究分担者二名の共同作業の結果であり、本研究の成果である。

まず、ヴィクトリア時代の宗教論の特徴として、1)「進歩イコール進化」、2)「未開イコール原始」、3)「起源イコール本質」の三点が前提とされていることが導き出された。

そのうえで、20世紀後半の宗教概念批判を先取りする視点が既にロバートソン・スミスによって、マジア(呪術・魔術・魔法)を人間にとって普遍的なものとして捉える見方がフレイザーによって、提出されていたことが明らかとなった。

2022年度に欧州の研究機関において、研究代表者が実施した文献調査の成果は、2023年度に刊行される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山崎亮	4. 巻 18
2. 論文標題 社会学年報学派における認識論の構図 あるいはデュルケムと哲学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 107-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎亮	4. 巻 5
2. 論文標題 比較宗教学講義 キリスト教	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根大学人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江川純一	4. 巻 24
2. 論文標題 近現代イタリアの政教関係 ベッタッツォーニのイタリア共和国憲法批判を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『研究所年報』	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江川純一	4. 巻 XXXVII特別号
2. 論文標題 ベッタッツォーニにおける宗教現象学と宗教史学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学宗教学年報	6. 最初と最後の頁 219-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎亮	4. 巻 4
2. 論文標題 比較宗教学講義 宗教のとらえ方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根大学人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計15件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山崎亮
2. 発表標題 英国人類学派と社会学年報学派のあいだ 昨日のトーマズム
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 一九世紀英国の宗教研究
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 公共圏における宗教知の構築—近代ドイツの霊媒裁判を事例に—
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 「民族共同体」における女性性と母性 フェルキッシュ・フェミニズムの諸相
3. 学会等名 ワークショップ「日独近代化における 国民文化 と宗教性」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 宗教研究の言説空間をめぐる ヴィーコからペッタッツオーニへ
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 アンドルー・ラングの神話学と宗教学
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 近現代イタリアの政教関係 ペッタッツオーニのイタリア共和国憲法批判を中心に
3. 学会等名 明学フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎亮
2. 発表標題 社会学年報学派の宗教観
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 「宗教現象学」を語ること その歴史と問題点
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 ヨアキム・ヴァッハの宗教理論(2)
3. 学会等名 「宗教理論」研究会(第四回)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 「新しい宗教理論史」の構想
3. 学会等名 「宗教理論」研究会(第六回)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 イタリア型政教関係の特殊性 「ライチタ」と「ライシテ」
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 宗教起源論の系譜と認知宗教論
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 宗教現象学における宗教の「起源」と「本質」
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎亮
2. 発表標題 社会学年報派における「新たなる宗教起源論」
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 江川純一、山崎亮監修、英国初期人類学宗教論集 ン・スミス、R.H. コドリントン	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 488
3. 書名 マナ・タブー・供犠 英国初期人類学宗教論集	

1. 著者名 伊達聖伸、小川公代、木村護郎クリストフ、内村俊太、江川純一、オリオン・クラウタウ、加藤久子、立田由紀恵、井上まどか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 332
3. 書名 ヨーロッパの世俗と宗教	

1. 著者名 Juncihi Egawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Poligrafici Editoriale	5. 総ページ数 25
3. 書名 Il Resto del Carlino 30 gennaio 2019	

1. 著者名 山崎亮翻訳、レジヌ・アズリアほか編著・鶴岡賀雄ほか編訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 774
3. 書名 宗教事象事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 亮 (Yamazaki Makoto) (40191275)	島根大学・学術研究院人間科学系・教授 (15201)	
研究分担者	久保田 浩 (Kubota Hiroshi) (60434205)	明治学院大学・国際学部・教授 (32683)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関